

山の本を楽しむ

藤井 論

第5回 ウェストン著「日本アルプスの登山と探検」

【概要】

日本アルプスを世界に紹介して、日本アルプスの父といわれるイギリスの登山家ウェストン(1861~1940)の日本滞在中の記録。槍ヶ岳、乗鞍岳、立山、穂高岳、御岳などへの登山や周辺地域の民情がユーモアに満ちた文章でつづられた山岳文学の古典。日本の先駆者たちもこの書物によって近代登山に開眼したという。岩波文庫から1986年発刊。青木枝郎訳。

【内容のポイントと感想】

ウェストンは上高地にレリーフがあり、毎年ウェストン祭が行われることで、山に登る人には広く知られている。嘉門次小屋を開いた上條嘉門次の道案内で槍・穂高の山々を登り、また乗鞍岳、立山、笠ヶ岳や御岳に登り、本著によって日本の山々のすばらしさを世界に紹介した功績は大変大きい。ウェストンはケンブリッジ大学と神学校を卒業して、宣教師として日本を訪れた。仕事の傍ら、ヨーロッパアルプスにはなかった日本の山の素晴らしさに魅せられ登山した。次は初めて徳本峠を越えて上高地へ入った時の文章である。

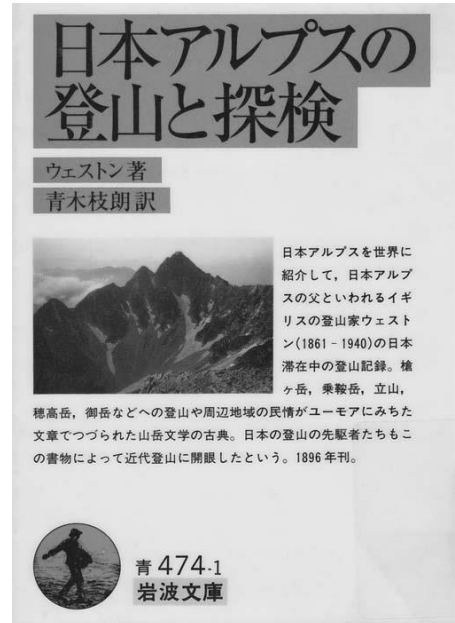
五時には徳本峠の頂上に着いたが、ここは海拔7100フィート、北の鍋冠山と南の霞ヶ岳の間である。峠の峰付近からの眺めはこの国でもとくに雄大なもののうちに数えられ、他の山々の丸みをおびた輪郭や、斜面を緑の樹木で蔽われた景観とはまったく性格を異にしている。私たちの目の前には穂高山の高峻な山体がたちはだかり、その南の麓をとりまいて流れる梓川の広い河原は、いちめん白い小石で埋めつくされていた。日本でもっとも高い花崗岩の峰として、1万1500フィートの標高をもち、斑雪の残る稜線から突き出た岩塔や尖峰によって「直立する稲穂の山」という美しい名前と呼ばれている。

右写真は昨年5月に私が徳本峠を経て霞沢岳に登り撮影した穂高連峰の写真である。この徳本峠方面からは、一際雄大に穂高の眺望が得られる。次はこの本でウェストンが槍ヶ岳山頂に立った時の記述である。

溪流の川床から休まず二時間登り続けて、稜線の狭い窪みに辿りついた。「槍」の穂先はここから急角度に起立している。そこからさらに北に進み、去年ベルチャーと二人で引き返した地点を無事に通過した。

滑りやすい、切り立ったスラブは、雨の時は危険だが、今度はすっかり

乾いていたし、その上いたるところに亀裂や岩棚があって、手掛かりと足場に不足はなかった。400フィートから500フィートくらい鎌尾根のへりに沿って進んだが、峰の上部が奇妙な具合によじれていたの、西に向かって急角度に方向を転換した。なおも十歩ほど登ると、もうそこが頂上だった。ついに槍ヶ岳をものにしたのだ。



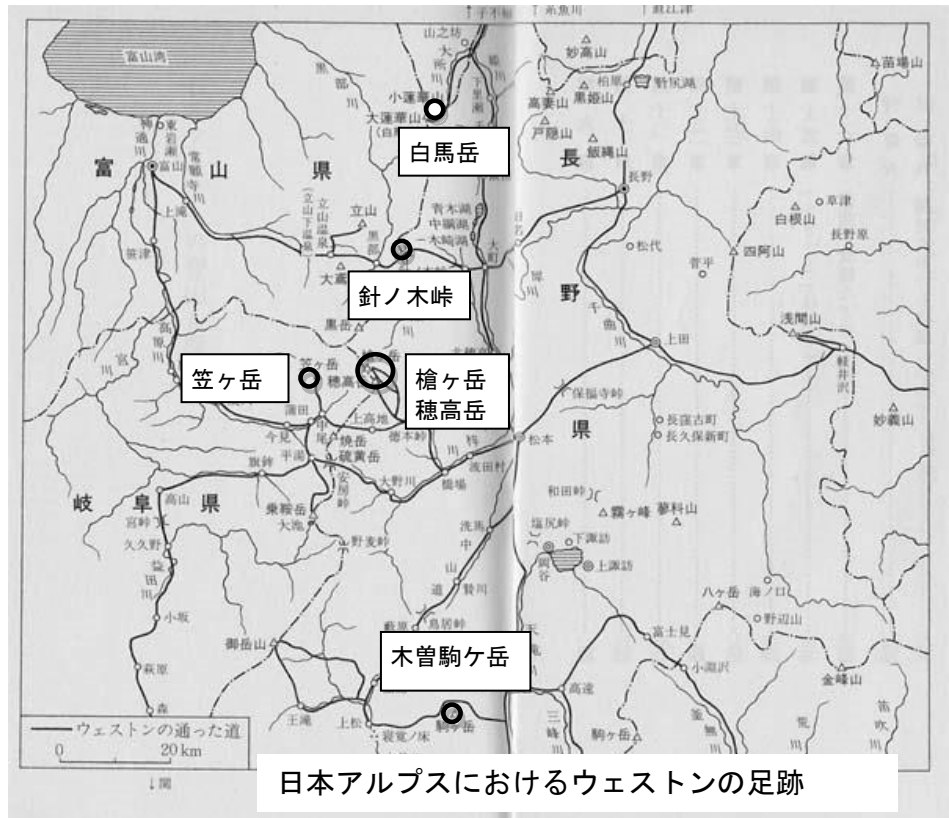
霞沢岳から望む穂高連峰

この本の魅力は登山の記録に留まらず、西洋人から見た日本人の生活の観察がユーモアを交えて記述されている事である。ウェストンはヨーロッパ人と多く異なる日本人の風習・文化・生活を興味深く観察して述べている。そしてその様子をユーモアを入れて記述しているところが、この本のもう一つの面白さである。次は御岳に登頂した時に出会った修験者の様子を記述した段落である。

海拔一万フィートの眺望をしばらく楽しんでみると、下の小屋から大勢の巡礼が登ってきたので、間もなく日の出になることがわかった。白衣の一团はうやうやしく祠に近づいて、熱心に祈りをささげ、供物を供えた。それから、祠が東に向いているので、彼らも東に向き直り、最初の黄金色の光がかすかに差ししてくると同時に、太陽の女神に向かって願い事を唱えはじめた。まずはじめに、自分たちの願いに対して神様が耳を貸して下さるように、拍手をうって注意をひき、次にハライの言葉を唱えはじめた。一斉に唱和する声にまじって、もう一つ別の呪文が絶え間なく聞こえた。それは巡礼の団体が山坂を登りながら繰り返している言葉で、「ロッコンショウジョウ、オヤマカイセイ」つまり「私の六つの感覚が清らかでありますよう、また、お山のお天気がよく晴れますように」と唱えているのである。

やがて、インムスビという、一風変わったパントマイムのような所作が始まった。その不気味なことといったら、何とも説明のしようがない、真剣に、強烈な気合をこめて両手の指を絡ませたり捻ったりして、子供の「あやとり」遊びのような不思議な手つきをしてみせるのだが、その一つひとつの型にそれぞれの意味があり、手指を精一杯働かせて見せるのだが、そのひとつの型をきめるたびに、それを強調する激しい気合がかけられた。この祈祷のパントマイムは、最後にクジゴシンポウという「悪魔を九回切り払う」奇妙な指使いを演じて終わりとなる。

右図はウェストンの足跡を示した地図である。針ノ木峠越え、福島からの木曾駒ヶ岳、親不知からの白馬岳などの記録が興味深い。登頂の記録が不明瞭なところもあり、横尾谷からの槍ヶ岳登山のルートがはっきりわからない。北穂を經由せず槍ヶ岳を登るためには、登山道の全くない横尾尾根を登って槍沢に入ったとしか考えられない。



穂高岳へ登頂した日は、天候を見て朝7時に嘉門次小屋を出て穂高岳山頂が午後1時過ぎ、帰りは徳本小屋に登り返して夕方6時着と驚異的な速さ

である。最も驚いたのは笠ヶ岳の登頂ルートだった。今の笠新道でもクリヤ谷ルートでもない、急な岸壁に囲まれた穴毛谷を詰めて稜線に取り付いたことを、この本を読んで知り驚いた。ウェストンが体力・技術に優れ、今の地図にはないルートを開拓して登っていたことがわかる。この本は県立図書館にも置いてあるので、是非一読されると良い。(つづく)